

九、主教会教書（一九八六年（昭和六一年）一月五日）

『日本聖公会組織成立百年記念の年一九八七年を迎えるに当って』

標語 「わたしたちを平和の器にして下さい」

（この教書は一九八六年一月五日（降誕後第二主日）の主日礼拝において、説教壇より朗読する。）

はじめに

救主降生一九八六年の年頭にあたり、日本聖公会主教会は、主イエス・キリストにあつて兄弟姉妹である忠信なる各位の安否を問い、また各位の上に私たちの父なる神と主イエス・キリストからいよいよ豊かに恩恵と平安が与えられることを祈ります。

さて、日本聖公会は、一九八七年に組織成立百周年の記念すべき年を迎えようとしております。一九八四年一月、第三八定期総会後第一回常議員会は、「日本聖公会組織成立百年記念に当り、過去の歴史を顧み、第二世紀に向つて強力に福音宣教を推進する」ことを決議しました。

この時に当り、主教会はこの記念事業を単なる行事としてのみではなく、一九八七年五月、大阪における記念大礼拝および将来に向つての霊的な運動として、ここに敬愛する全聖職・信徒各位に教書を送る次第であります。それは日本聖公会がキリストにあつて一つ心となり、この時を、過去のある出来事を想起する時としてのみではなく、歴史的出来事のうちに働かれた神の救いのみ業とその召し出しに今日あずかる時としてとらえ、それを通してますます主の平和の器として献身してゆくことができるようになるためであります。

組織成立の意義

一八五九年（安政六年）米国聖公会から派遣されたリギンス、ウイリアムズ両師が、キリスト教禁制下の長崎に上陸することにおいて聖公会の宣教が始められました。実際の公会活動の開始には、ウイリアムズ師は七年間の「困難と忍耐と沈黙」の時を過ごさなければなりません。次いで、英国聖公会宣教師協会（C・M・S）および英国聖公会福音宣教師協会（S・P・G）からの宣教師の来日を待ちましたが、この三つの宣教師団体の働きは、相互の連繋や計画性になおしばらくの時を要したのであります。

ここに、初代の日本主教ウイリアムズ師父は英国からのピカステス主教と相語り、一八八七年（明治二〇年）二月一日、大阪の三一神学校において第一回の総会を開き、「日本聖公会」という名称のもとに一つの「法憲法規」・「祈祷書」を制定し、公同の教会ならびに礼拝を成立させたのであります。このようにして実を結んだ組織は、決して外面的な制度上のことのみにとどまらず、エルサレムから始まり、世界各地に拡がったキリストのからだの一つの尊い枝としてこの日本の地にも根付き、育てられ、福音を宣教する一つの責任主体となったという、世界教会史上のなかならずく聖霊の導きによる出来事でありました。ここに私どもはウイリアムズ、ピカステス両主教の卓見ならびに「日本の宣教は日本人の手で」という邦人諸先輩の燃えるような気概を銘記するものであります。

私どもは、歴史を導き恵みたまう神の裕護のもとに、「地の果てまで我が証人となれ」との主イエスの召し出しに従つた母教会の宣教師の祈りと汗と涙の献身、多くの経済的捧げものを感謝すると共に、その伝えられた福音を喜び、死に至るまで忠実であつたこれらの信仰の諸先輩を誇りとするものであります。

宣教の意味

そもそも宣教とは、キリストの福音を宣べ伝え、それに生きることを意味します。それは「十字架につけられたキリスト」を宣べ伝えることであります。教会には、神の愛と命が豊かに注がれております。それゆえ教会には、キリストのからだとして目に見える生き生きとした姿をしていることが望まれるのであります。聖職も信徒も先ず自らキリストの愛に立ち、その恵みと喜びのうちにあゆみ、更にこの世の隣人に、キリストの愛がいかに大きく、広く、深いものであるかを、思いと言葉と行いで証言していくよう召されているのであります。

人を差別し、軽くあしらい、尊敬しないことは、主キリストの御心に反する行為であります。神は歴史の中で世の人びとにそのように語りかけておられます。それゆえに、私たちもキリストの視点に立ちこの世の人びとと共に生きつつ、キリストの御心を宣べ伝え、愛と正義と平和のわざに組してゆかなければなりません。その時、神はますます教会を御自身の平和の器としてお用いくださり、さらに多くの人びとをその群れに加え、そして終末におけるすべての人びとの一致へと導いてくださるであります。

日本聖公会の現状と課題

日本聖公会組織成立以来、米・英両聖公会をはじめとして、カナダ、オーストラリアや聖公会の援助も加わり、宣教は着実に進展してまいりましたが、日本聖公会が真に自主、自立の管区となるためには、なお日中戦争、太平洋戦争という苦難の時代を経ることになります。全体主義的軍国主義の思潮の渦の中で、日本聖公会が全体として明確な方向性をとることができず、また教団として存続不可能という厳しい試練にあえぎながら敗戦を迎えました。戦後、日本聖公会に対する母教会の配慮は、いち早くその再組織を可能にし、今日ようやく管区としての自覚のもとに、受ける教会から与える教会へと脱皮することに目覚めはじめたのであります。

今、私どもは過去百年間に与えられた神の導きと恵みを感じると共に、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなしたという怠慢と過誤を深く懺悔し、主の示したもう道に向って前進する決意を新たにすべき時を迎えているのであります。

世界を覆う核戦争の恐怖と相互不信に対しては平和を、抑圧と差別に対しては和解を、自然破壊と環境汚染に対しては創られたすべてのものとの共存を、経済的不平等に対しては平等の使信を大胆に宣べ、また自らの中で実現して行かなくてはなりません。

そのために第一になさなければならぬことは、他者に求める前に、自らの共同体のあり方への反省であります。宣教を第一とする管区機構への改組、教区間の共存協力、持てる資源の有効な活用と交流を通じて、日本全体の宣教に共同の責任を果す管区の姿が浮かび上がってくるであります。

第二には、地域社会に生きる教会の形成であります。各個教会こそ宣教奉仕の最前線の担い手であります。社会の全分野に浸透し、ことに抑圧され差別された人びとと共に問題を担い、共に泣き、共に喜ぶ奉仕の姿勢を貫かなければなりません。

第三に、信徒一人一人の力の結集が必要です。すべての信者は受洗のうちに額に十字の徴しをいただき、世にあつて神と人とに仕えるべく召されたキリストの戦士であります。それぞれに神が分かち与えられた賜物が十分に生かし用いらねければなりません。「あなたがたの手で食物をやりなさい」と命じられた主は、それを成し遂げるのに必要な賜物をすでに教会に与えておられるのであります。

第四に、教役者の自覚と継続教育が欠くことのできない課題であります。聖職は世にあるキリストのからだの働きの象徴であり、人びとに任せ、信徒に身仕度をさせる責任者であります。もしも信徒が宣教奉仕の第一線で充分な働きができないとすれば、それは聖職の責任であります。そのためには聖職自身に、絶えざる研鑽と霊的刷新が求められるのであります。聖職自身が先ず、何が福音で、現代世界にいかんば宣べ伝えるべきかについて真剣に取り組まなければなりません。

第五は、世界聖公会の一員としての世界宣教への共同責任に關してであります。今日は、一国のみで生きて

行くことのできる時代ではありません。宇宙的視点から鳥瞰する時、世界のあらゆる人びとは相互に依存し合っており、一方において学び受けると同時に、他方、惜しみなく与えることを実現するのでなければ主の御心に従うことにならないであります。

第六に、従って、教会再一致の視点が強調されなければなりません。他教派の人たちとの協働は必然となるであります。神は唯一、神が創り愛したもう世界は一つ、それに仕えるキリストのからだである教会は一つであります。教会が現実に分裂していることには、まことに痛みを覚えるものであります。教会がキリストの祈りのように再び一つとなつて一つの世界に奉仕する時に、階級、国家、人種によつて分裂している世界に対する目に見える希望の徴を見ることができるとあります。

各個教会、各教区、管区における記念のしかたについて

キリストのからだの肢である私たち一人一人は、神の国からこの地上に派遣された大使であり、その具体的な責任を果す場合は、日本であり各教区、各個教会であります。

各個教会には、今日まで自らのなしたことを顧み、感謝すべきことが何であるかを見出し、悔改めるべき点を悔い改め、来るべき新たな百年に向つて自らの手で具体的方策があるかを見出していく作業が求められております。全員がこれに参与していく時、神の約束された大いなる業をなすことができるであります。

次にそのようにして得られた各個教会ごとの認識と組織成立第二世紀に向つての計画あるいは決意は、各教区でなされる記念礼拝に持ち寄られ、捧げられ、すべての教会の間で相互に分かち合われることが重要であります。また教区はそれらの認識あるいは計画あるいは決意を受けとめ、教区としての宣教の方策を求め、それらを実施してゆくことが必要であります。

そして一九八七年五月、組織成立ゆかりの地である大阪において日本聖公会が名実共に一つのキリストのからだとして捧げる記念大礼拝の中で、各教区が感謝と賛美、悔い改めと信仰のうちにそれぞれの決意あるいは宣教方策を持ち寄り、捧げ、分ち合い、ともに恵みにあずかり、これを通じて私たちが主の平和の器となり、日本、アジア、そして世界の中において召し出されている宣教の責任をとるにも果してゆくものとなるよう念願して止みません。

父と子と聖霊なる全能の神が、わたくしたち一同を祝し、導き、この時をまことにみ心にかなう実りゆたかな尊い時として用いさせ、み名の栄光を現わすものとならせて下さいますように、アーメン。

救主降生一九八六年一月五日（降誕後第二主日）

日本聖公会 主教会

議長・北海道教区主教 ヨ ハ ネ 渡辺政直

沖縄教区主教 パ ウ ロ 仲村實明

大阪教区主教 クリストファー 木川田一郎

中部教区主教 アブラハム 植松從爾

東北教区主教 コルネリオ 田崎安男

京都教区主教 セント・ジョージ 八木成之

東京教区主教 ヨ ハ ネ 山田 襄

九州教区主教 ヨ セ フ 飯田徳昭

神戸教区主教 パ ウ ロ 八代 欽一

横浜教区主教 ラファエル 梶原史朗

北関東教区主教 ヤ コ ブ 八代 崇